



を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

夏 目漱石が『吾輩は猫である』で文壇に登場したのは、明治38年(1905年)1月発行の雑誌『ホト、ギス』においてである。その後『ぼっちゃん』が発表され小説家として揺るぎない実績を築き上げていくのであるが、明治38年といえば漱石は38歳である。作家としては晩成の方であろう。それならば、それまで何をしていたかという、まさにこの本の表題の「英語教師 夏目漱石」であったのだ。

帝 国大学(現東京大)2学年在学中に、25歳で既に東京専門学校(現早稲田大学)で週2回英語を教え、大学卒業後明治26年に高等師範学校で、明治28年の1年間『坊っちゃん』の舞台である愛媛県尋常中学校(現松山東高校)、そして明治29年から33年まで熊本の旧制第五高等学校(現熊本大)、その後2年の英国留学を終えて、明治36年から朝日新聞社に入社する明治40年までの4年間、旧制第一高等学校と東京帝国大学で英語・英文学の教師を務めていたのだ。留学期間を含めば実に約15年間にわたって英語教師であったのだ。

こ の本の面白いところは、漱石が生半可の英語教師ではなく、本格的で最前線の英文学研究者であり、英語教師であり、さらに教育学者であ

ったことを解き明かしていることだ。
教 育学者であることは25歳の大学在学中に「中学改良策」なる教育論文を書き、教授法と教員の実地研修の必要を説き、教員給与の値上げの必要を論じ、各学校に必ず1名はネイティブの英語教師を置くことを提唱していることでも分かる。また英語教育学者としては27歳のときに英語教育論「GENERAL PLAN」なるものを著わし、ヒアリング・スピーキングを重視し小学校5・6年からの英語授業の必要を謳っていることだ。

ま た英語教師としては愛媛県尋常中学で教えるを受けた人々の証言として、優しく几帳面で明快で熱心な、信頼できる教師であったことが語られている。その後第五高等学校では驚くことに入学試験問題を作り続けるのである。それもヒアリングを重視した問題である(多分試験場では漱石自身のスピーキングで)。彼の作った問題が本に載っているので見てください。そして生徒の生活の面倒をみるほど生徒思いの先生であったことが記されている。その後東京大学の教師としてはラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の後釜で苦勞するのだが、やがてシェークスピアの講義で人気講師となっていく。

こ の本のもう一つの読みどころは明治の教育の様子を伝えてくれるところである。よく漱石はヒアリング・スピーキングに弱く、それゆえに留学中にノイローゼになったと巷間伝えられるのだが、そんなことはないと言著者は否定する。なぜならば漱石の学んだ頃の旧制高校や大学では英文学はもとより歴史学など、国語漢文を除いて多くの科目が外国人により英語で教えられていたからだ。しかも漱石は幾人かの外国人教師に目を掛けられるのである。そこではヒアリング・スピーキング能力なしではやっていけないのだ。笑ってしまうことに前述の教師歴とは別に、旧制高校時代19歳で学資稼ぎのため、なんとある塾で地理や幾何を教えたのだが、それも英語で教えねばならなかったようである。

こ の本には小説家夏目漱石の、英語教師としての一面が詳細に記述されているのだが、ひるがえって考えるならば、このように頂点まで登り詰めた英語教師人生を捨てて、筆一本の作家生活に漱石を走らせたものは何であったのであろう。年齢的にも当時の40歳といえば現代の50歳以上に相当するであろうに。人の生の営みについても考えさせられるある種の重い本でもある。



◀『英語教師 夏目漱石』
川島幸希著 新潮選書
定価(本体1,200円+税)